

福井県池田町方言の「準多型」アクセントとフット・韻律語構造

松倉 昂平（東京大学大学院）

1. 池田町方言について・発表の概要

福井県今立郡池田町は、足羽川の上流に位置する人口約 2500 人の農村である。周囲を山地に囲まれ地理的な隔絶がやや大きく、周辺地域とは異なる独特の方言を持つことが町内外で広く知られている。本発表では、発表者の現地調査¹を通じて得られたデータに基づき、従来詳しい報告のなかった池田町方言の名詞のアクセント体系の共時的記述と音韻論的解釈を行う。

2~6 モーラ語には、(1) のようなピッチパターンが見いだされる。[はピッチの上昇、] はピッチの下降を表す。

- (1) [ハ]コ・ガ マ[ド]・ガ
 [サ]カナ・ガ ハ[タケ]・ガ
 [カ]ミナリ・ガ ム[ラサ]キ・ガ オ[トコユ]・ガ
 [カ]レンダー ハ[ナバ]タケ ク[スリバ]コ フ[ランスゴ]・ガ
 [ハ]タラキカタ カ[ナキ]リゴエ ム[カシバ]ナシ オ[レンジイ]ロ ニ[ワト]リゴ]ヤ

表面上はピッチの下降位置が区別される体系であり、一見、東京方言など多くの日本語諸方言と同じく、アクセント核が音節ないしモーラ単位で数えて語のどこに置かれるかが区別される「多型アクセント²」であるように思われる。一方で、東京方言のような $P_n = n+1$ の体系には見られない以下のような特異な性質が認められる。

- a) 2 型³を欠く
- b) アクセント型の対立数が典型的な多型アクセント（多くの方言では、 n モーラ語に $n+1$ 通り）と比べると少なく、3 モーラ以下の語では 2 通りの型しか区別されない
- c) 3, 4, 5 型の分布は語の音節構造・複合語構造から予測できる
- d) 前部要素が 4 モーラ以上の複合語には、下降が 2 回生じるニ[ワト]リゴ]ヤのような実現型が頻出し、下降が 1 回しか生じない型（カ[ナキ]リゴエ）とは区別される

多くの日本語諸方言においては、アクセントの位置を数える単位として音節またはモー

¹ 2016 年 12 月～2018 年 7 月までに池田町内 6 地点で調査を行った。本発表で取り上げる体系は、町南部の旧今立郡上池田村に相当する地域に分布する。本発表の記述は主に、池田町西角間生え抜きの 1936 年生男性話者に対する調査に基づく。

² 「アクセント単位の長さに応じて対立数が増えていく体系」（上野 2012: 45）

³ 語頭から数えて n モーラ目の直後に下降が生じる型を「 n 型(がた)」と表記する。

ラ、アクセントが付与される単位として語あるいは文節といった単位が用いられてきた。池田町方言に関しては、ピッチの下降位置を数える単位として「フット」、フットが形成されアクセントが付与される単位として「韻律語」を導入することで、一連の音調型をより簡潔に一般化し、上記の特異な性質に体系的な説明を与えることができる。

2. フットと韻律語

フット (foot) とは、韻律階層において音節と韻律語の間に位置する、通常 2 モーラまたは 2 音節から構成される韻律単位である。日本語 (東京方言) においては短縮語の生成や複合語アクセント規則などに 2 モーラフットが関与することが指摘されている (Poser 1990 など)。近年は、アクセント体系やリズム現象の基本的な記述においてフット構造の参照が不可欠である方言が発見・報告されている (Poppe 2016 など)。

韻律語 (prosodic word) とは、韻律階層上フットの直上に位置する韻律単位である。近年では、琉球諸語宮古語の諸方言において、韻律語をアクセントの付与される位置を数える単位として仮定しなければ、アクセント体系の妥当な記述ができないことが明らかになっている。宮古語における韻律語とは、2 モーラ以上の語根・接語が写像される韻律単位であるが (五十嵐 2016: 38 など)、本発表で池田町方言に仮定する韻律語の役割とその形成規則は、宮古語のそれとは異なる。

3. 池田町方言のフット・韻律語構造

3.1 単純名詞の音調に見るフット構造

2~5 モーラ単純名詞とそれらに 1, 2 モーラの助詞が付いた文節の音調を示す。

(2) 2~5 モーラ単純名詞の音調

	拍・音節数	単独形	+ガ	+カラ	
α		[ハ]コ	[ハ]コ・ガ	[ハ]コ・カラ	
		[サ]カナ	[サ]カナ・ガ	[サ]カナ・カラ	
		[カ]ミナリ	[カ]ミナリ・ガ	[カ]ミナリ・カラ	
		[コ]マーシャル	[コ]マーシャル・ガ		
β	2 μ 2 σ	マ[ド	マ[ド・ガ	マ[ド・カラ	} 名詞内部で 下降なし
	3 μ 3 σ	ハ[タケ	ハ[タケ・ガ	ハ[タケ・カラ	
	4 μ 3 σ	オ[レンジ	オ[レンジ・ガ	オ[レンジ・カラ	
	4 μ 2 σ	[テンジョ]ー	[テンジョ]ー・ガ	[テンジョ]ー・カラ	} 名詞内部で 下降あり
	4 μ 3 σ	[テンプ]ラ	[テンプ]ラ・ガ	[テンプ]ラ・カラ	
	4 μ 4 σ	ム[ラサ]キ	ム[ラサ]キ・ガ	ム[ラサ]キ・カラ	
	5 μ 4 σ	ア[クセ]ント	ア[クセ]ント・ガ	ア[クセ]ント・カラ	
	5 μ 4 σ	ボ[ランティ]ア	ボ[ランティ]ア・ガ	ボ[ランティ]ア・カラ	

2~5 モーラ単純名詞には、常に 1 モーラ目に下降が生じる型 (α 型) と 3 モーラ目以降に下降が生じる型 (β 型) の 2 通りの型が区別される。

問題となるのは、 β 型文節の 3~5 モーラ目に生じる下降の位置をどのように定式化するかである。3 型を基本としながら、オ[レンジ]・ガ、ポ[ランティ]アのように 3 モーラ目が特殊拍⁴であれば下降が 4 モーラ目以降に後退する。ただし、ハ[タケ・カ]ラのように、「3 モーラ名詞+2 モーラ助詞」は 3 モーラ目が特殊拍でないが 4 型になる。

音節単位の分析も問題を含む。「天井」(2 音節) や「天ぷら」(3 音節) が音節数の等しい「窓」や「畑」ではなくむしろモーラ数が等しい「紫」と同じように振舞うためである。

下降が名詞内部に生じるか否かという観点で (2) の β 型語を二分すると、「マド」「ハタケ」「オレンジ」が名詞内部に下降が生じない語、「テンジョー」「テンプラ」「ムラサキ」などが名詞内部に下降が生じる語となる。これらを分ける基準は、名詞のモーラ数でも音節数でもない。(3) のような規則により形成される「フット」の数であると考えられる。(4) には (2) の β 型語のフット構造を示す。

(3) フット形成規則： 韻律語の左端から 2 モーラフットを形成する

(1 モーラ韻律語には 1 モーラフット)

韻律語形成規則 (暫定版)： 1 モーラ以上の単純名詞と 2 モーラ以上の助詞は独自の韻律語を形成する

(4) 2~5 モーラ β 型単純名詞のフット構造 (() はフット境界)

拍・音節・フット数	単独形	+ガ	+カラ
2 μ 2 σ 1F	(マド)	(マド)ガ	(マド)(カ)ラ
3 μ 3 σ 1F	(ハタ)ケ	(ハタ)(ケ)ガ	(ハタ)ケ(カ)ラ
4 μ 3 σ 1F	オ(レン)ジ	オ(レン)(ジ)ガ	オ(レン)ジ(カ)ラ
4 μ 2 σ 2F	(テン)(ジョ)ー	(テン)(ジョ)ーガ	(テン)(ジョ)ー(カラ)
4 μ 3 σ 2F	(テン)(プ)ラ	(テン)(プ)ラガ	(テン)(プ)ラ(カラ)
4 μ 4 σ 2F	(ムラ)(サ)キ	(ムラ)(サ)キガ	(ムラ)(サ)キ(カラ)
5 μ 4 σ 2F	(アク)(セ)ント	(アク)(セ)ン(ト)ガ	(アク)(セ)ント(カラ)
5 μ 4 σ 2F	ポ(ラン)(ティ)ア	ポ(ラン)(ティ)アガ	ポ(ラン)(ティ)ア(カラ)

フット構造を仮定すれば、 β 型は「語頭から数えて 2 つ目のフット (の 1 モーラ目) に下降が生じる型」と簡潔に一般化できる。

単純語の音調を見る限り、池田町方言のアクセント体系は、アクセント単位の長さにかかわらず常に α/β の 2 つの型のみが対立する「二型アクセント」の 1 種と解釈できる。

⁴ 撥音 (ン)、長音 (ー)、促音 (ッ)、二重母音 (ai, oi, ui) の後半 (イ) を指す。

3.2 助詞と韻律語構造

2 モーラ以上の助詞が単純名詞と同様に 1 つの韻律語を形成すると見る論拠の 1 つは、ム [ラサ]キ・カラ / ム [ラサ]キ・ナラ のような助詞内部での下降の有無の対立が、 α 型語あるいは 2 フット以上の β 型語の直後で観察される点にある。アクセントの対立を有するならば、助詞にも名詞と同じく韻律語としての地位を与えることに無理はない⁵。

「ナラ = α 型 / カラ = β 型」と見た場合、なぜ「1 フット β 型語 + カラ」ではマ [ド・カ]ラ、ハ [タケ・カ]ラ のように「カラ」に常に下降が生じるかに対する説明が必要になる。基本的に韻律語がアクセント単位となるが、2 フットに満たない β 型韻律語は、後続する韻律語を自らのアクセント単位に取り込む、と本発表では考えておく。

(5) 1 フット β 型語のアクセント単位の拡張 (<> はアクセント単位)

<(ハタ)ケ> _{β} + <(カラ)> _{β} → <(ハタ)ケ (カラ)> _{β}

<(ハタ)ケ> _{β} + <(ナラ)> _{α} → <(ハタ)ケ (ナラ)> _{β}

cf. <(ムラ)(サキ)> _{β} <(カラ)> _{β} , <(ムラ)(サキ)> _{β} <(ナラ)> _{α}

3.3 複合名詞と韻律語構造

まず前部要素が 2~3 モーラの複合名詞の音調を示す。複合語の語根境界を (+) で表す。

(6) 前部要素が 2, 3 モーラ (1 フット) の複合名詞の音調

	モーラ数	単独形	+ガ	+カラ	
α	2 μ +2 μ	[ア]サ+ガオ	[ア]サ+ガオ-ガ		「朝顔」
	3 μ +2 μ	[ウ]ルー+ドシ	[ウ]ルー+ドシ-ガ		「閏年」
β	2 μ +2 μ	ハ[リ+ガ]ネ	ハ[リ+ガ]ネ-ガ	ハ[リ+ガ]ネ-カラ	「針金」
	3 μ +1 μ	オ[トコ+ユ]	オ[トコ+ユ]-ガ	オ[トコ+ユ]-カラ	「男湯」
	2 μ +3 μ	ハ[ナ+バ]タケ	ハ[ナ+バ]タケ-ガ		「花畑」
	3 μ +2 μ	ク[スリ+バ]コ	ク[スリ+バ]コ-ガ		「薬箱」

複合語の (前部要素の) 1 モーラ目に下降が生じる型 (= α 型) と、複合語の後部要素の 1 モーラ目に下降が生じる型の 2 通りの型の区別がある。後者は、モーラ単位で下降位置を数えると、前部要素が 2 モーラならば 3 型、前部要素が 3 モーラならば 4 型となるが、複合語の構成要素が独自の韻律語を形成すると見れば、2 つ目のフットに下降が生じる型 (= β 型) と解釈できる。すなわち韻律語形成規則は (7) のように修正される。

(7) 韻律語形成規則 (修正版) : 1 モーラ以上の単純名詞及び複合名詞の構成要素と 2 モー

⁵ ただし、助詞「ナラ」に生じる下降は α 型の実現ではなく、取り立て・限定の意味を表す助詞を強調するイントネーションの実現である可能性もある。

ラ以上の助詞は独自の韻律語を形成する⁶

(8) 4~5 モーラ β 型複合名詞のフット・韻律語構造 ({ } は韻律語境界)

拍数 (フット数)	単独形	+ガ	+カラ
2 μ +2 μ (1F+1F)	{{ハリ}} {{ガ]ネ}}	{{ハリ}} {{ガ]ネ]ガ}}	{{ハリ}} {{ガ]ネ}} {{カラ}}
3 μ +1 μ (1F+1F)	{{オト]コ}} {{ユ}}	{{オト]コ}} {{ユ]ガ}}	{{オト]コ}} {{ユ}} {{カラ}}
2 μ +3 μ (1F+1F)	{{ハナ}} {{バ]タ]ケ}}	{{ハナ}} {{バ]タ]ケ]ガ}}	
3 μ +2 μ (1F+1F)	{{クス]リ}} {{バ]コ}}	{{クス]リ}} {{バ]コ]ガ}}	

次に、前部要素が 4 モーラ (2 フット) の複合名詞の音調を示す。

(9) 前部要素が 4 モーラ (2 フット) の複合名詞の音調

モーラ数	単独形	+ガ	+カラ
$\alpha + ?$ 4 μ +2 μ	[ハ]タラキ+カタ	[ハ]タラキ+カタ-ガ	
$\beta + \alpha$ 4 μ +2 μ	ニ[ワト]リ+ゴ]ヤ	ニ[ワト]リ+ゴ]ヤ-ガ	ニ[ワト]リ+ゴ]ヤ-カラ
$\beta + \beta$ 4 μ +2 μ	カ[ナキ]リ+ゴエ	カ[ナキ]リ+ゴエ-ガ	カ[ナキ]リ+ゴエ-カラ

多くの語にニ[ワト]リゴ]ヤのような 2 段階の下降が生じる。この音調は、 β 型前部要素 (ニ[ワト]リ) と α 型後部要素 (ゴ]ヤ) の連続として解釈できる。これに対して、カ[ナキ]リゴエのように後部要素内部に下降が生じない語は、 β 型前部要素と β 型後部要素の連続である。複合語全体として 1 つのアクセント単位にはまともらず、その構成要素 (韻律語) のレベルで α / β の型が指定されている。ただし前部要素が α 型の場合、後部要素内部の下降の有無が必ずしも明確には判断できず、後部要素が α 型か β 型かには曖昧さを残す。

(10) 2 フット+1 フット複合名詞のフット・韻律語・アクセント単位の構造

フット数	単独形	+カラ
2F+1F	<{(ニワ)(ト]リ)}> _{β} <{(ゴ]ヤ)}> _{α}	<{(ニワ)(ト]リ)}> _{β} <{(ゴ]ヤ)}> _{α} <{(カラ)}> _{β}
	<{(カナ)(キ]リ)}> _{β} <{(ゴエ)}> _{β}	<{(カナ)(キ]リ)}> _{β} <{(ゴエ)}> _{β} <{(カラ)}> _{β}

ちなみに「小屋」は α 型 ([コ]ヤ)、「声」は β 型 (コ[エ) であり、後部要素固有の型が複合名詞の型に保存される傾向が認められる。しかし (11) のように β 型名詞については、複合名詞の後部要素になると α 型に転じる例が複数ある。また (12) のように、ほとんどの複合名詞で前部要素は β 型となる。よって複合名詞の型としては「 β 型+ α 型」が最も無

⁶ 独自の韻律語を形成できない 1 モーラ助詞の韻律的な不完全性は、1 モーラ助詞自身がアクセント型の対立を持たないことにある。韻律語形成の可否を決する基準は、形態素の長さ (1 モーラか 2 モーラ以上か) よりもむしろ、アクセント型 (α / β) の指定が可能かどうかにある。

標かつ生産的な型であると考えられる。

(11) 草刈り (β 型) + 鎌 (β 型) → ク[サカ]リガ]マ (β 型+ α 型)

(12) 雷 (α 型) + 雲 (α 型) → カ[ミナ]リグ]モ (β 型+ α 型)

4. α 型と β 型の音韻論的解釈・まとめ

本発表では、韻律語の1モーラ目に下降が生じる α 型を「アクセント単位の初頭モーラにアクセント核が置かれる有核型」、 β 型をアクセント核のない「無核型」と解釈する。 β 型の第2フットに生じる下降はアクセント核による下降ではなく、 β 型の音調型は全体として1つの「語声調」(早田1999)の実現であると見る。

このように「 α 型=有核/ β 型=無核」とみなす論拠の1つは、複合名詞のアクセント(3.3節)である。この解釈に従えば、最も生産的な複合名詞のアクセント型「 β 型+ α 型」は「前部要素には核がなく後部要素の初頭モーラに核が置かれる型」となり、日本語諸方言において最も一般的な2種の複合語アクセント規則(「後部要素の核が保存される」あるいは「前部要素と後部要素の境界付近に新たに核が付与される」と同様の規則を本方言にも見出すことができる。

上記の解釈によれば、アクセント単位(≡韻律語)内部ではアクセント核の有無のみが区別され、位置の対立はない。有核型と無核型のみが対立する一種の二型アクセントと捉えられる。しかし表面上のピッチの下降位置をモーラ単位で数えると、あたかもその位置が弁別的である多型アクセントのようにも見える。また、助詞が固有のアクセントを持ち、複合語では後部要素の型を保存する傾向が見られるなど、多型アクセントに典型的な特徴を多く備える。このように、一見すると多型らしいが音韻的なレベルではN型(二型)として解釈されうる体系を、本発表では「準多型」アクセントと呼ぶ。

謝辞

本発表は国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」の研究成果である。本研究は特別研究員奨励費「言語地理学と比較再建に基づく福井・石川両県のアクセントの記述的・通時的研究」(16J03745)の支援を受けている。

参考文献

- 早田輝洋(1999)『音調のタイポロジー』大修館書店。
五十嵐陽介(2016)「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」『言語研究』150, 33–58。
上野善道(2012)「N型アクセントとは何か」『音声研究』16(1), 44–62。
Pope, C. (2016) Iambic feet in Japanese: evidence from the Maisaka dialect. *Gengo Kenkyu* 150: 117–135.
Poser, William J. (1990) Evidence for foot structure in Japanese. *Language* 66(1), 78–105.